

それ



伊井直行

レワニワ書房

それ

私の身長は一九五センチです。聞かれれば、習慣で一九〇センチと答えます。もちろん以前は、少しでも低く自分の身長をごまかしたかったです。いまは、自分の身長に、特に引け目を感じることはありません。ただの習慣です。一九〇センチと一九五センチを見分けられる人には、まだ出会ったことはありません。

学校に通っていた頃は、大変でした。学期毎に身体検査というものがありましたから、身長をごまかすことなどできません。

みんな、私が身長計に乗るのを待っているのです。計測された値が読み上げられると、たいてい誰かが「ふへー」だの「ひゃー」だのと声を上げ、時には何人か意地の悪い連中が聞こえよがしに笑います。急にむくむくと背の伸び始めた小学校六年のときから、高校を卒業する年までずっとそうでした。身体検査は、私にとって、苦痛以外の何ものでもありませんでした。学校での身体検査なんて、どうしても必要なものだったのでしょうか。

十日ほど前、仕事でまわっていた先の小さな駅で、私を懐かしい気分させる出来事がありました。列車を待って、改札口のそばに立っていると、近くに同じ列車に乗ろうとしてい

る帰宅途中の高校生の集団がいて、チラリチラリと私に視線を向けるのです。ホコリじみた学生服を着、坊主頭に黒い帽子を載せた十人ほどの集団の中に、一人だけ濃紺の制服を着た女子生徒が混じっていました。小柄な少女でしたが、その子が集団を離れ、何気ない振りを装いながら、私に近寄って来ました。そして、しばらくの間、私の横で立ち止まってから、また元の集団に戻って行きました。少女が私のそばに立つと、残った連中は小さな声で囁きを交わし、少女が戻ると、それは押し殺した笑いに変わりました。少女は、私の大きさを計るメジャーとして派遣されたのでした。

中学や高校のときには、こんなことがよくありました。都会の大学に行ってみると、私は、田舎にいるときほど目立たないようで、人間メジャーが近寄って来ることはなかったのです。そう、七、八年ぶりの経験でした。平気です。私は、自分を鈍感であるようにしつけ、それにほぼ成功しました。神経過敏の大人なんて、お笑い草にもなりません。まして、この図体ですから。

二年前に結婚しました。妻の身長は一六〇センチです。妻は、誰にたいしても優しく親切です。結婚する前も、結婚してからも。ただ、意外だったのは、結婚前は、家庭的な女だと思っていたのに、料理が得意でなく、掃除も洗濯も嫌いだったことです。結婚後、私は慢性的な下痢から解放され、小食になりました。時々強い憂鬱状態に落ち込んで、時には死にた

くもなったりするのですが、それは以前にもあったことです。結婚とは関係ないでしょう。確かに、この穂屋市には憂鬱症の人間が多いようです。去年、造船所の閉鎖が正式に発表されてから、一段と多くなりました。何しろ穂屋は、大正時代からずっと大手造船会社の企業城下町だったのですから。しかし、私の憂鬱症の歴史は、造船所の閉鎖決定よりはるか以前に遡ります。中学のときから——学校の中で、いる場所がないと思いつながら、この大きな身体を隠すことさえできず、遠慮のない視線にさらされてゆらゆらさ迷っていた、その頃からです。湯微島に行ったのは、そんな憂鬱症が最もひどかった高校二年生のときでした。

## 2

小学校の最後の身体検査では一七七センチだったのが、中学に入學すると一八〇センチの大台に乗っていました。中学の入學式の直後、田舎のことで、頭を丸刈りにされた私たち新入生を待っているのは、運動部の先輩たちによる強引な入部の勧誘でした。休み時間や放課後、暗い部室や階段のわきに引っ張り込まれる恐ろしさに、何人もが登校拒否症になりかかりました。私もその一人でした。

思い出してみれば滑稽な光景です。私よりずっと背の低い上級生が、見上げるようにして

睨みをきかせ、脅しつけ、巨大な子供である私は震え上がり泣きそうな顔をしている。上級生は、私との身長差が気になり、私たちを（新入生は複数で拉致されるのが普通でした）正座させます。あるいは、最初に私を笑いの対象にして、背の高さのもたらす上下関係を無効にしようとしています。私は、背が高いというだけで殴られたり侮蔑の言葉を甘受しなくてはならなかったりする理不尽な世界に突入したのでした。

どのみち新入生は運動クラブへの加入を義務づけられていました。私はバスケットボール部かバレーボール部のどちらかを選ばなくてはなりません。それが当然と誰もが考えているようでした。私はどちらにも入りたくなかったので、追いつめられた気分でした。私の運動神経はないに等しかったのです。結局バスケットボール部に入りました。私が見ただけの坊であると皆が知るのに時間はかかりませんでした。それでも、学校間の練習試合のときに、相手に威圧感を与えるためというので、控えとしてベンチに座らせられることがあります。しかし、新入生どうしの試合に私が少しでも登場したあとには、そのような効果は期待できなくなります。私は大したでくの坊でした。

二年の一学期の終わり、私はバスケットボール部をやめました。私より少し前にやめた二人と合わせて、土曜日の午後、空いた教室でリンチを受けました。中途退部者が必ず引き受けることになっている別れのセレモニーです。リンチを行うのは、三年生と、二年生の一部

です。恩きせがましい説教、軽蔑の言葉、暴力。暴力。暴力。三年生はともかく、リンチに加わっていた同年年の連中の顔を未だに忘れません。

高校に入ると、まことにうんざりし、また恐ろしくもありましたが、ここでも運動クラブの強圧的な入部の勧誘が待っていました。運動部への加入は学校の奨励するところだったので、この脅しから逃れる術はないようでした。同じ中学の先輩が、あいつは入れても役に立たないからと取りなしてくれない限りは。そんな場合でも、何か辱めの言葉を浴びせられないではすみませんでした。

「お前、ピクニック・クラブに入れよ」

そう言ったのは、ラグビー部の部室に連れ込まれそうになっていたところを救出してくれた中学校の先輩でした。このTという男は、バスケット部ではなかったのですが、家が近く顔見知りだったのです。

「ピクニック・クラブに入ってるって言ったなら、どの運動部の連中も無理に誘うようなことはしないはずだよ」

Tは私の肩をポンと叩くと、いつもの妙に気取った歩き方で去って行きました。Tは中学校で行われる地区ごとの集まりではリーダー格でしたが、その説教じみた口調が気持ち悪くて、私はTが大嫌いでした。それなのに私はなぜTの言うことを聞いてしまったのでしょうか

か。

「ピクニック・クラブに入るつもりなんですけど」

まだピクニック・クラブに入る前から、その名前を口に出す機会がありました。何しろこの巨体ですから、運動部の勧誘は頻繁でした。

声をかけて来たハンドボール部の二年生ふたり組は、私がそう言うと、一人はニヤリと笑い、もう一人は、私をもう一度上から下へと眺め下ろしたあと、

「お前、どこか悪いのか？」と尋ねました。

「いえ……ぼく運動が全然駄目なんです」

ふたりは顔を見合わせました。

「ま、そういうことならいいや」

ピクニック・クラブという言葉は、Tの言ったとおりの効果を発揮したのです。やがて、あの新生の巨人はピクニック・クラブに入るのだと知れ渡り、強制的勧誘は私に対しては行われなくなりました。まだ実際に入部する前に、です。

ピクニック・クラブに入ると先輩たちに宣言したからには、私は必ず入部しなくてはならないと考えていました。ところが、なかなかピクニック・クラブに入ることができません。そんな名前のクラブは存在しなかったからです。それは、ボランティア活動を本来の目的と



するグループの軽蔑的別称だったのです。だから、自分の力できがそうとしていたときには、ピクニック・クラブは決して見つかりませんでした。

私をピクニック・クラブに導いてくれたのは、私の担任の教師でした。四月末、家庭訪問の前の個人面接で、まだクラブに入っていないようだがときかれ、ピクニック・クラブの名前を出したところ、担任が苦笑しました。彼はそのクラブの顧問だったのです。そして、「ピクニック・クラブ」という呼び方は、彼の気のない顧問ぶりに対する皮肉でもあったのでした。

担任に紹介されて会った三年生の部長が、その年の活動の予定を紹介してくれました。

「五月に梅崎海岸に行って新入生歓迎会をします。七月の初めに、市の運動公園で清掃奉仕、八月の末に、造船祭り花火大会の後片づけの手伝い、十一月には演劇部、家庭科クラブと一緒に老人ホームの慰問を行います」

それが一年の活動の全てでした。

「参加は強制ではありませんが、なるべく参加するようにしてください」

しかし、三年生は、この部長も含めて、新入生歓迎会が終わると誰ひとりクラブの活動には参加しなくなるのでした。

ピクニック・クラブがどのような性格のクラブであるのか、梅崎海岸での新入生歓迎会に

出席してみて、ようやく私にも分かりました。

歓迎会は、ちょうどいま私たちがいる所から十メートルほど水際に近い場所で行われました。ここは夏場は海水浴場になりますが、シーズンを外れると、ご覧の通り、むしろ寂し気な場所です。高校からは、自転車で三、四十分、一日に三本、高校の近くを通るバスが複雑な経路の果てに、この近くの漁港を折り返しの終点にしています。土曜日の午後、数人はバスに乗り、私を含む残りの何人かは自転車をこいで向かいました。

二十人近くの生徒がクラブに登録していたはずですが、その日参加したのは八人、そのうち新入生が四人。新入生歓迎会に参加しなかった新人がふたりいました。そのふたりは、ピクニック・クラブのことをよく知った上で、確信的な潔さをもってクラブへの登録を行い、以後その確信を揺るがせにしたりしませんでした。つまり、その後もクラブの集まりには一度も参加せず、それでも翌年もピクニック・クラブに登録し、一年分の部費六百元を納めたのです。生徒は三年の一学期まで何らかのクラブに所属する建前でしたから、彼らふたりは勉強に専念するために最も拘束の少ないピクニック・クラブを選んだのでした。

「あのふたりは、なかなか性根が据わってますね」聞いているとなぜだか不安になる丁寧すぎる口調で部長が言います。「ま、友達はできにくいでしょうけど」

松林と砂地の境の日当たりのいい場所で、部長と私ともう一人の一年の男子の三人は、暖

かな風にその面を撫でられて穏やかに波立つ海を眺めていました。丸々と太った女生徒である三年生の副部長は、おとなしい新人の少女ふたりを連れて、どこかで貝を拾っているはずです。ふたりいた二年生の男子は、昼食後、配給の缶ジュースを飲むと、用事があるからと帰ってしまいました。

「登録だけして全く現れない奴が、毎年一人かふたりはいます。でも、そういう人たちって、たくさん勉強する割には成績が良くないみたいですね。あと、たまに本当にボランティア活動をしようと思って入って来る人がいて困ります。たいてい、そのうち、あきらめますけど。あの副部長がそうだったんです。いまは、学校の外でキリスト教の活動なんかしているらしいです」

部長は、女生徒たちがいなくなって吸い始めた三本目の煙草に火をつけ、そのまま黙ってしまいました。もうひとりの新人は沈黙が平気な性質らしく、私だけが何か話題を見つけてはと焦っていました。そして、間抜けな質問をしました。

「部長は、なぜこのクラブに入ったんですか？」

部長は、肺の奥からにごった煙を吐き出した後、唇をわずかに歪めるようにして微笑みました。

「僕は、高校に入るまで極端に体が弱くて入院ばかりしてたから、進級が三年も遅れてしま

いました。最近は、もう普通より丈夫なくらいですけど。来月二十一になります」

そう言って、もう一度煙を深く吸い込んだ部長の顔が、急に大人びて見えました。

「あなたたちと同じように、僕もなんとなく入ったというだけです。それなのに、気がついたら、入るべきところに入ってた、このクラブ、変なのばかり集まるんで、その——」部長は、言いかけた言葉を呑み込み、下を向きました。「みんな、色々言うけど、気にしないことです」

「ピクニック・クラブ」よりさらにひどい、部長が口を濁したくなるほどの侮蔑的別称もあったのです。ピクニック・クラブは、学校中の落ちこぼれを集めた吹きだまりとして生徒や先生たちに認識されていたのでした。何といたるところにはまり込んでしまったのだろうか、と私は心の中で嘆きました。おあつらえ向きといって、こんな酷いおあつらえ向きはありません。私はTを激しく憎みました。でも、何ができるわけでもなく、私もまた名目上のピクニック・クラブ員になろうと決意したただけのことでした。

### 3

皮肉なことに、このときから私にとっての新しい時間が流れ出しました——私なりの高校

生活が始まったのです。クラブ活動は、私には縁のないものだど覚悟を決めた、そのときから。

別の中学から来た同級生と新しい友達つきあいが始まり、中学生のときとは違った話し方で違った話をするようになると、自分がほんのわずかでもまともな高校生に近づいた気がしました。新しい環境に対する不慣れのために、学校に行くのは苦痛以外の何ものでもありませんでしたが、五月も末になるとその重苦しさも薄らぎ、学校にいて決して楽しくはなかったにしろ、平静な気分を保てるようになったのでした。好奇の視線を浴びせられる機会も、次第に少なくなって来ました。みなが私の存在に慣れたのでしょうか。

苦痛は消えませんでした。時間は確かに流れていました。だから、苦しみをやり過ぎさえずれば、ゴールが近づいて来るはずでした。ゴールとは、高校を脱出し大学に逃げ込むことです。それでも、時々死にたいと思っていました。苦しみをやり過ぎとは、言葉で言うほど簡単なことではありません。

夜、自分の部屋にいて、鉛筆を削ったあとの小刀の先を、こびりついた滓をはらってから、左胸の上に当ててみたことがありました。死のうとしたのではなく、そうやって自分が本当に死にたいのかどうか試してみたのです。私は死にたかったというより、現に生きている自分自身を自分が先頭に立って否定しなかったのです。そのときには、死に際して味わうで

あろう痛みへの恐れが、私の自殺を妨げているのだと信じていました。死そのものに対する恐怖は、私の理解できないものでした（今も理解できません）。私の思考や感情は、私の脳や神経の中で起こる生理的・化学的反応に過ぎないと考えていましたから。今もそう思っています。死んだら終わり——そうあって欲しいものです。それで十分です。

七月の清掃奉仕も、八月の花火大会後片づけも、用事があるからと断りました。ところが、十一月の老人ホーム慰問は、参加するつもりであると伝えました。義務感でも罪滅ぼしでもなく、何とはなしに行ってもいいなと思えたのです。家庭科クラブの女生徒たちが参加すると知っていたことは、確かにこの気紛れの誘因になっていました。私も、だいぶ高校生活に慣れて、気持ちにいささかの余裕を生じていたのでしょう。ところが、本当に参加するつもりでいたのに、訪問が予定されていた前日、私は高熱を伴う風邪をひき、欠席してしまっただけでした。風邪は苦しかったけれど、何かホッとしているようでもありました。その日の不参加を残念に思う日が来るなどと、予測できるはずがありませんでした。

当人にとって深刻な悩みが、はたからは滑稽に見えてしまうというしばしば目にする情景は、笑われる者にとっては不条理であるにしても、世の中の全体からすれば当り前のことに過ぎません。例えば、非常に太っていたり背が高すぎたりする人が、ごく親しい友人や、肉親、精神科医以外の人に、自分は悩んでいると告げたとすると、面と向かって笑うかどうか

は別として、聞かされた方は滑稽に感じます。これは、世の中の基本的な仕組みの一部なのです（人を笑わせる芸の古典的なパターン）。私は、そのことを十代の半ばまでに学び取っていました。小刀の先を自分の左胸に当ててみたことがあるなんて、たった今まで、誰にも話したことはありません。高校生のときはただただ猫背のおとなしい巨人として受け入れられればいいと思い、事実、一年の後半には、そのようになりつつあったのでした。だから、私は満たされていたかという点、事はそう簡単には運びません。

私は新しい悩みを抱え込んでしまい、その悩みが、曲りなりにも流れていた私の時を止めてしまいました。私は恋——片思いをしたのです。これこそ絶対誰にも知られてはならない秘密でした。私は、本当のところ誇り高い人間で、人に笑われるのは嫌だったし、今も嫌なのです。私が片恋をしていると知れば他人は必ずや笑うに違いない——そう確信していました。

4

一年の三学期も残り少なく、うっとうしい三年生はいなくなり、学年末テストも終わった春休みの前の穏やかな日の午後、私は一人の、名前も知らない女生徒を好きになりました。

中庭の渡り廊下で、何分の一秒か目が合っただけでしたが、その女の子を遠い昔に知っていた気がして、あれは誰だったかと考えるうち、答えは出ないまま、その少女の姿が脳裏に焼き付き、その焼き付いた姿に恋をしたのです。黒い豊かな髪に明るい目と少しふっくらした頬の、どちらかという土地味な印象の少女でした。

こういうのは「恋に恋する」というのだと、その頃だっただけで知っていましたが（中学校の保健体育の時間に習ったので）、知ってたからどうなるというものでもなく、私は本当に悩みました。もちろん誰にも言わずに。どんな女の子も決して私を好きにならないと確信していました——私の身長をもってしてもバランスを逸して長い顔と、短い足（なぜ神様は短い顔と長い足にして下さらなかったのでしょうか）。事実、それまでの十五年間、誰か女の子が私を好きになったという徴候はありませんでした。しかし、こんな時には、誰もが奇跡の起こるのを望み、なかなかその望みを捨て切れないものではないでしょうか。私はそうでした。でも、一体、どんな奇跡が？

春休みの終わりが待ちどおしかったというのは、空前の経験でした。学校が始まると、私はいついかなるときもその少女の姿を追い求め、見て分かる限りどんな小さな小さな情報も逃すまいとした結果、間もなく、彼女は家庭科クラブの一員であることが判明しました。私が、どれだけあの風邪ひきを悔やんだか、改めて言うまでもないでしょう。余程のことがない限り、



その女生徒と知り合う機会はなさそうでしたから、なおさらです。彼女は、一学年に二クラスだけ存在する女子生徒だけの家政科に属し（この科は、私が卒業して二年後に廃止されました）、家政科の女子生徒と親しく話をする機会は、私のような積極性に欠ける男子生徒には、滅多にあるものではないのです……でも、話をしたかった。話をしない限りは、何とか自分の気持ちを彼女に伝えない限りは、私の高校生活は無意味であると、いつか思いこんでいました。決めた途端、本当に生活は無意味になりました。こうして、流れていた時間が止まったのです。

ところで、喜ばしい奇跡が、もっと別のところで起こりました。入学時に一九四センチだった身長が、一年後の検査でも一九五センチにしかなくなっていなくなったのです。嬉しいには違いありませんが、起こってほしかった奇跡はこれではありませんでした。

四月の連休に入る前、長いまっすぐな髪と青白い頬の女生徒が、休み時間の教室にやって来て私を呼び出し、この人は誰だろうと思っていると、五月の新生歓迎会に参加するつもりはあるかと尋ねました。それで、やっと同学年のピクニック・クラブの一員と分かり、「行くつもりです」と答えました。

すると女生徒はきつい口調で「ぜひ参加してください」と念を押すのです。そういえば、彼女たちが中心になってクラブの活動を盛んにすべく頑張っていると、聞くとはなしに聞い

ていました。

「欠席するときは、必ず事前に連絡してください」とも言いました。

昨年の慰問のときの私のひどい風邪は、ピクニック・クラブの連中には伝わっていなかったのです。私は少なからずムツとしました。本当に参加するつもりでいたからです。というのも、私の片恋の相手である女子生徒の家は、どうやら梅崎海岸の方角らしく、遠足の行き帰りに偶然会えるのじゃないかという期待があったのでした。

五月の最初の土曜日、私は、もう一人、同学年の無口なピクニック・クラブ員とふたりで、自転車をこいで梅崎海岸に行きました。行きがけにあの女生徒の姿を見かけることはありませんでした。集合場所に着くと、もうみんな集まっていて、人数は全部で十五人ほど、あるうことが顧問である私の前学年の担任までが加わっているのです。

自己紹介があり、弁当を食べ、お菓子をわけあい、ジュースを飲み、今後の活動をめぐる話し合いがあり、ちょっとしたゲームが行われました。昼食が終わったら帰ろうと思っていたのに、私は、これまで三百回は聞かされて来た私の身長をめぐる冗談を、さらに三、四回、聞く羽目に陥ったのです。うんざりでした。

次のゲームの準備などでようやく座がバラけて来たとき、この機会を逃してなるものかと、私はひとりで抜け出し、自転車を置いた場所に急ぎました。無口な男はなぜか結構楽しそう

にしていたので誘わず、先生への挨拶もしませんでした。

松林の外れで自転車をこぎ出し、ほんの少し進んだとき、松林沿いに走る狭い舗装道路のわきに、私の通う高校の制服を着たふたりの女生徒が立っているのに気づきました。ふたりは、私の二十メートルほど先にいて、少し前まで話をしていたのが、いまは私の方を見ている様子です。一人は私を呼び出したピクニック・クラブの女生徒。そしてもう一人は、カバンを積んだ赤い自転車のハンドルを握って立っているのですが、私がこの遠足に参加する動機になった少女に違いないのです。彼女たちは、私の進んで行く先にいました。何という驚きでしょう。会いたかった望みが叶えられたのに、私は殆ど意気消沈しているのです。

私の自転車はズンズン彼女たちの方に近づいていきます。しかし、ピクニック・クラブの女生徒に何を言えればいいのか、私は決められませんでした。彼女たちの姿を認めた瞬間から、頭の中は混乱状態に陥り、爬虫類並みの段階へと退行して、言葉なんかひとつも浮かんで来ません。自転車をこいでいる自分が自分ではないみたいでした。

ふたりのそばに近づき、少し自転車のスピードを落として、彼女たちの方を向きました。そうしたら口が勝手に何か喋るかと思っただけです。しかし、ワニの頭では「さよなら」の一言を発するのさえ能力を越えていました。不思議な沈黙の時間が過ぎていきました。私の胸は、内側から焼け焦げていくようでした。ピクニック・クラブの女生徒は、チラリと私の目

を見ましたが、何も言いませんでした。

ふたりの前を通り過ぎた私が、呆然と進行方向に向き直ったとき、ふたりの笑い声が背後から聞こえて来ました。それは、女の子たちが、お互いどうし、この人は笑ってもいいと了解したときに笑う、あの恐ろしい笑いでした。

5

私が湯微島に行ったのは、この年の夏休みのことです。両親には、北陸の方を回る三、四日のひとり旅と吹き込んでおきました。しかし、実際には、反対方向に向かう列車に乗り、隣りの市で連絡船に乗り換えたのです。湯微島まで一時間半の行程ですが、この間に県境と「地方」の境を、合わせて四つ越えることとなります。穂屋市は、陸と海でそれぞれ別の県と「地方」の双方の境に接しているからです。私の目論見は、こうでした。

湯微島に着きしだい、身元を調べる手助けになるような荷物を全部捨ててしまい、その日のうちに首をつる。私は取り敢えず身元不明の死体になります。両親が私が帰って来ないのを心配し、警察に捜索を依頼するのは、恐らく出発して五日以上たってから。しかも、まず見当外れの場所から捜し始めることとなります。おまけに、県と「地方」と二重に行政区画

が違っていけば、警察や行政当局の連絡は格段に風通しが悪くなるはずです。こうして、元不明の遺体と行方不明者の情報が行き違い、私が永久に氏名不詳の死人になりおおせる可能性が生じます。問題は、私の高すぎる身長です。しかし、誰でもない死体になるために、できるかぎりのことをするつもりでした。前にお話した通り、私は「死にたい」というより、自分がこの世界に存在しているという事実を否定しなかったのです。「私である死体」になることは、望ましくありません。

湯微島には、小学生のときに二度行ったことがあります。一度は子供の遠足で、もう一度は家族旅行で。湯微島の観光名所といえば、天司山の中腹にある湯飛湖と決まっています、二度とも湯飛湖を見ることが旅行中の最大のイベントでした。湯微島と湯飛湖、同じ「ゆび」なのに字が違っていることについて、何かいわれがあったはずですが、もう覚えていません。

子供の遠足のときには、観光バスで湯飛湖に行きました。家族旅行では、父の運転する車で。このほか、湯飛湖には路線バスやケーブルカーを使って行く方法もあります。もちろん登山道もあって（天司山の標高は九〇〇メートル近く、湯飛湖の海拔も五〇〇メートル以上だったはずで）、遠足のときには、猿だらけの細い山道を、子供会のみなどで、一時間もかけ、汗まみれになって下ったのです。その山道をわきにそれ、なかなか人目につきにくい場所を選んで、私は首つりの死体になるつもりでした。

フェリーが内泊うちどまりの港に着くと、私は早速バス・ターミナルに行き、島内のバス時刻表をもらいました。そして、「人生の残りの数時間」の予定を組みました。死ぬのは夕方と決めていました。せっかく湯微島に来たのだから、ひとつ見ておきたいところがあったのです。井緒鼻いおびなの灯台です。小学校のときの湯微島訪問で二回とも予定に入っていたながら、どちらの場合も、時間の都合で予定が取りやめになってしまったのでした。どうせ大して面白くころでもないでしょうが、一度は見えておかないと、湯微島に来たことにならない気がしました。

井緒鼻方面に向かうバスの本数が少ないので、湯飛湖に夕方までに辿り着くためには、バスの接続や乗り換えの時間をキチンと確かめておく必要があります。慎重に検討した結果、前二回には乗らなかつたケープルカーを使って、四時過ぎに湯飛湖に到着するスケジュールができあがりしました。

停留所から三十分も歩いて辿り着いた灯台は、予想通りただの白い灯台で、面白くもおかしくありません。ひとつ意外だったのは、灯台を見に来た人間が、私以外に一人もいなかったことです。

私は、灯台の近くにある小さな広場の海に向けたベンチに腰かけ、フェリー港で買った弁当を広げました。空は晴れ渡っていましたが、秋を思わせる乾いた風が吹いていたという覚えがあります。弁当を食べながら、もし「私の死体」が発見されたとしても、動機については、家族も友人たちも「思い当たるふしがない」と言うしかないだろう、と考えました。遺書もないし、死を匂わせるような言葉を発したこともありませんか。あの少女たちは、梅崎海岸での無言のすれ違いのシーンを思い出すでしょうか。たとえ思い出したとしても、それが私の死の直接の動機だったとは考えないでしょう。もう三か月もたっています。それに、事実、動機ではないのです。あれは、私を思い切らせた「きっかけ」ではないはずでした。

私は、ずっと以前から、自分と、自分の生きている世界とのズレを意識していました。そして、あ有的时候、このズレが決定的なもの、生きている限り絶対に逃れようのないものとして認識されたのです。世間で「背が高い」と言ってプラスの評価を得られる基準から、たった十センチ、オーバーしていたために生じた、隠しようのない、些細ではあっても全く修正不可能であるズレ……このとき、私が考えたことは間違っていない、と今も思います。ただ、私が知らなかったのは、自分と世界とのズレについて悩むことが、十代の若者にとって、ごく普通のことではないという事実でした。

弁当を食べ終わっても、灯台を見に来る人は、私以外に一人もありません。私は、これも

フェリー港で買っておいた缶コーヒーを飲みました。次のバスまで、まだ随分と時間があります。それで、急な細い坂道を、手摺につかまって灯台の下の磯浜海岸へと下りて行きました。

足もとばかりを見て、ぎこちなく歩いていたら、「ボッ」と汽笛が聞こえました。

目を上げると、海岸からさほど遠くない沖を、K汽船所属の客船が通って行くではありませんか……島の灯台から客船が見えるという光景が、決してありふれたものでないことを理解して頂けると嬉しいのですが。いま、この国には、フェリーではない長距離の定期航路用客船というのは、離島航路を除くと数えるほどしか残っていません。その一隻を偶然見ることができたのです——これを幸運と呼びたくなるのは、私が造船業の町の人間だからに違いありません。穂屋には船好きの人間が多く、マニアというほどではありませんが、私もその中の一人だったのです。

船には、修学旅行でしょうか、女生徒の集団が乗っていて、そのうちの何人かが私に向かって手を振りました（それほど、船との距離が近かったのです）。私が手を振るかどうかためらっているうち、船はグングン遠ざかってしまいました。女の子たちは、私が手を振ったら大笑いしようと待ち構えている気がしました。

小さくなっていく船尾を眺めながら、一瞬「もう少し、生きていてもいいかな」と思いそ



うになりました。でも、すぐに、この考えを打ち消しました。これでは「橋の上から見た夕陽があまりに美しかったので、飛び降りるのを止めた」という紋切り型に似すぎています。

坂道を下り切って波打ち際に向かい、ゴツゴツした岩場を歩いて行きます。こういう場所を歩くのは得意ではありませんが、幸いにも誰も私を見ていません。危ないと思ったら、好きなだけ尻をつけてバランスを取りました。海は、穂屋湾と変わらないくらい静かに凪いでいます。波の音よりも、近くの山で鳴いている鳥の声の方が大きく聞こえるくらいに。テール状の岩場を、波打ち際まで下りられるポイントをさがして、しばらく歩き続けました。海の水に手を浸してみたかったです。

やがて、岩のくぼみに取り残された海水がいくつもの小さな池になり、夏の太陽に照らされて明るく輝いている場所が目に入りました。そこに行くためには、多少のアクロバットをこなさなくてはなりませんでしたが、私はそれをやり遂げました。そこでは、岩は湿り気を帯び、足を滑らさないように、またフナムシを踏み潰さないように、足を下ろすときに注意が必要でした。不用意に手をつくすと、フジツボが皮膚を傷つけるかもしれません。海水が岩とじゃれ合うピタピタという音が聞こえます。私が、それを発見したのは、波打ち際まで十メートルほどのところに到達したときでした。

それは、遠くから見たときには、白く輝いて、海水の溜りの一つとしか思えなかったのだ

す。もう少し近づいてからは、岩と岩の間の溜り水のように見えました。しかし、すぐそばまで来て分かったのは、それが岩と岩の間に挟まった何かであるということでした。海水でない証拠に、それは、隙間から少々盛り上がっていました。

私は、それが何であるのか確かめようと、片方の岩の上にはしゃがんで、じっくりと眺めました。……私は、そのものの姿を、結局うまく表現し切れないだろうと思います。それが、何なのか、そのときも、今もまったく分かっていないのですから。

岩と岩の間は、上から見て思ったより広くて、六、七十センチあったでしょう。隙間にスッポリ挟まっていました。長さは、あとでもっと長いと分かるのですが、そのときは二メートルほどに見えました。色は、やや黄色がかかった白ないしアイヴォリーで、どころに濃い赤紫色の、細いけれども周囲がにじんで見える縞模様が入っています。表面は、豚や河馬といった動物の表皮を思わせますが、しばを入れたプラスチックのような無機的な感じもありました。全体の形は……これは、何とも言いようがありません。白みがあったから、特大の魚の白子を連想しそうになりますが、事実、一目見て何にいちばん似ていると思ったかと聞かれれば、動物の内臓と答えていたでしょうが、最初からそんな形をしていたのか、それとも岩に挟まったために取りあえずそんな形になっているのか、定かでないです。

ただ、触らなくても、水気を含んでプヨプヨしている様子が見て取れ、多分生き物、それも動物の方なんじゃないかと考えました。しかし、植物でないと断言しているわけではありません。まさか人工物ではないと思いますが、不自然さを感じる個所もありました。表面の数か所に、トウモロコシの毛のような「髪」が生えていて、その「髪」のいわば「畑」に当たる部分が、いずれも全く等しい面積の正方形なのです。

「自然界に直線は存在しない」と誰かが言ってますんでしたっけ？ また、見える限り、表面の三か所に、直径五センチほどの穴が開いていました。深さは分かりません。奥に腫があれば目、肺に通じていれば鼻孔、歯があれば口、また耳、泌尿器、肛門、膣のいずれでもないという感じの穴です。あるいは、潮を吹き、わけの分からない毒液を吐き出し、さらには怪獣のように火を吹いても不思議ではない——こう言うと「動物説」に傾いているようですが、そうではありません。

表面の1か所に、ソーセイジ状の物体が、七、八本、かたまって「生って」いる部分があるのです。その物体だけは濃い茶色で、表面も固そうに見え、本体にどんな具合に付着しているのか不分明でしたが、指や性器が突起しているというより、何か植物の実が「生って」いるように、私には感じられたのです——全体の印象をまとめるなら、臭いこそしません、胸クソ悪くなるような何ものか」ということになるでしょう。

不意に、人の気配を感じました。振り返ると、白い短パンにランニングシャツの、真っ黒に日焼けした男の子が、私の後ろ一メートルほどのところに立って、一心にそれを見詰めていました。ランニングの胸に『3の1 和田』とマジックインキで書かれたゼッケン。手にはゴーグルとヤスを持っています。

「これ何なんだろうな？」

私が語りかけると、和田君は、一瞬、私と目を合わせましたが、何も答えず、固い表情のまま、それの方に向き直りました。

「この辺じゃ、何て呼んでる？」と、私は聞き直しました。

すると、和田君は緊張した様子で首を横に振りました。こんなもの、今まで見たことも聞いたこともない、と言いたかったのでしょうか。これで、それが、湯微島の特産品でないことが分かったわけです。

私と和田君は、しばらく黙って、それを見詰めていました。

「これ、生きてるんやろか？」

和田君が、初めて言葉を発しました。

「そうだなあ。さっきから見てるけど、ピクリとも動かないし、死んでるんじゃないか。まあ、こいつが、前に生きてたことがあったとしての話だけだ」

「人間て、死ぬとこんなふうになるんやないか？」和田君が奇想天外な質問をしました。

私は、ギクリとしました。この島に死ぬために来たのだということをお願い出したからです。「違う、違う」と、私は返事しました。「人間は、死んでも人間の死体になるだけで、こんな変なものになったりしないよ」

和田君は、真剣な表情で、それを見詰めていましたが、間もなく、

「わし、人を呼んで来るわ」と言い、岩のテーブルへ駆け上がりました。

私が、やっとのことで下りた岩場を、和田君は、まるで平地を走るように楽々と駆け上がって行くのです。

再び一人になってみると、それは、いかにも気味の悪いものに感じられました。しかし、一方で、表面に触れてみたい気持ちもわいて来ました。多分、それが余りにもわけの分からないものなので、せめて感触なり確かめておきたくなったのでしょう。

さすがに最初から素手で触ってみようという気にはならず、足を伸ばして、運動靴の先を、その表面に当ててみました。それから、固さと反発力を知るために——なぜそんなことをしたのか、あとから理由を考えればということですが——靴の先をギュッと押しつけました。全く抵抗がないなと思ったとき、それは突然ズリりと動き始めたのです。

私は、とっさに二、三步後ずさり、安定を失って尻餅をついてしまいました。

それは、音も立てず、しごく滑らかな動きで、吸い込まれるように海の中へ移動して行きます。岩の隙間は、そのまま五メートルほど先で海につながっているのです。私は、驚きと恐怖で身動きができず、ただジッと、それが動いていく有様を見詰めていました。

それは、とてもゆっくりと移動して行きます。そして、見ているうちに、それは、自分の力で動いているのではなく、重力によって引張られている——要するに、海の深い部分へ「落ちて」行く最中なのではないかと思えて来ました。なぜ、と聞かれると困りますが、その動きは、ゲル状の物質が一時の安定を失い、新しい安定を求めて、ある一方に向かって仮の重心を移動させて行く様を、私に連想させたのでした。あるいは、針金を丸めて棒状にまとめ、勝手に段差を下りるようにつくったオモチャが、階段を律儀に一段、一段下りて行くときの動きを。もし、私の直感が正しいなら、それは、二メートルなどという大きさではなく、海中にまで届く延長部分を持っているはずです。

私は、立ち上がって、それが「落ちて」行く先の海の中をのぞいてみました。すると、その白っぽい「胴体」は、何十メートルも、ひょっとしたら何百メートルも長く、海の底に向かって続いており、その先端を確かめることは到底できそうにありません。

「ポチャン」と音がしました。たった今、その後端が、海中に没したのです。それは、ズルリ、ズルリ、暗い海の底の方へ、緩慢に落下していき、やがて私の目には全く見えなくな

ってしまいました。

呆然としていると、背後から、湯微島の方言で激しくののしりあう声が聞こえて来ました。和田君が、一人の制服を着た警官を連れて戻って来たのです。和田君は、途方に暮れて、するような目で私を見ました。私は、海の方角を指さしました。

和田君は、私のそばに駆け寄り、一度海の中をのぞき込んでから、「逃げたんか？」と、尋ねました。

私は、首を横に振り、「いや、落ちていった」と答えました。

和田君は、疑わし気な目で、私を見上げます。

「君も、その変なものを見たんか？」

二十代半ばと見える小柄な警官が、私に尋ねました。

「ええ」と、私は答えました。

「それで、それは、なんやったんや？」

「分かりません。今まで見たことのない変てこなものでした」

「それは、死んでたと、この子は言うとしたが」

「僕も、そう思います」

「その死んどったもんが、どうしたら影も形もなくなってしもたんかな？」

警官の口調には、明らかに不快の気味が感じられました。

「海の中に、落っこちてしまいました」

「君は、何もせんのか？」

私は、小さくうなずきました。

「ふむ」警官は、しばらく考える様子を見せてから、再び私に尋ねました。「で、それは人間の死体ではなかったわけやな？」

「それは違います」

「そんなん、分からへん」ずっと黙っていた和田君が、突然、口を挟みました。「あれ、人間の死体やったかもしれへんで。調べもせんと、分かるわけないやないか」

「あんな、人間の死体は、絶対はない」と、私は言いました。

しかし、和田君は納得しません。「この中やな」と海を指さして言うなり、海パンいっちょようになり、ヤスを片手に海に飛び込みました。そして、深く潜っては息をついでまた潜り、それを何度も繰り返し、疲れ切った様子で、岩の上が上がって来ました。

「君らなあ」警官が、私と和田君に話しかけます。「わしをだましたなんて怒らへんから、正直なところを言えや。ほんとは、何も見てへんのやろ？ わけの分からん死体なんか、ここには、なかったんやろ？」



和田君と私は、顔を見あわせました。

「それともなあ」警官が、言葉をつぎます。「その、あったともなかったとも分からん何かのために、わしらは捜索隊を編成して、海さらいをせなあかんのか？　それで、何も出てこなかったら、君らは、何と言いつつるつもりなのか？」

警官は、私の顔に敵しい視線を向けています。

私は、しばらくためらったあと、

「ここに、死体はありませんでした」と、言いました。

和田君は、強い非難の目で私を睨みつけました。そして、子供の混じりけのない真剣さで私を激しくまじりました。

「うそつきや。こいつは、凶体ばかりデッカイ、根性なしのうそつきや！」

「こら、ボン。人を、うそつき呼ばわりするなんちゅうのは、よっぽどのことやぞ」と、警官がたしなめます。

しかし、和田君は、警官の言葉を無視し、私にも一瞥さえ与えず、自分の荷物をまとめて、岩のテーブルの上に登ってしまいました。

「さあ、そろそろ潮が満ちて来たら、この辺りも波の下やな」

警官は、私に聞こえるようにひとり言を言い、階段を上がるように、ヒョイヒョイと軽い

足取りで岩を登って行きました。

しかし、そのあと、私は、波に呑み込まれないために、素手のロック・クライミングをしなくてはならなかったのです。

乗るはずだったバスは、とうに出ていました。次のバスでは、湯飛湖に行く最終のケーブルカーに乗ることができません。

7

その日の内に、穂屋に帰りました。家族には、お金をなくしたと予定変更の理由を説明しました。母親は、息子が早帰りをしたことで、拍子抜けしたような、ホッとしたような妙な顔をしていました。そのあと、夏中、ボーッと過しましたが、はた目には、私はいつもと何の変わりもなく見えたようです。

……この話をしたのは、あなたが二人目です。最初は、私の妻に。

「へえー、そう」と妻は言いました。多分、信じていない——というより、関心が湧かないみたいでした。

うそ偽りなく言います。私はその時、妻の無関心さに救われた気がしたのです。警官に真

実でないことを語りましたが、それはいま妻と私の生きている世界では、真偽いずれであろうと意味がないと明らかにしてくれました。その存在を信じてくれる人は、世界中に一人もいないかもしれません。

……和田君ですか？

どうでしょう。私の見たものと、あのとき少年の目に映ったものとは、随分違っていただけではないかという気がします。長い時間がたった今では、ますますその違いは大きくなっていくことでしょう。それに、和田君は、自分の記憶を、私とわけあう気などないはずですよ。「図体ばかりデッカイ根性なしのうそつき」なんかとは。

そう。井緒鼻の灯台です。湯微島に行ったら訪ねてみるべき場所です。時間が合えば、K汽船の客船が通るのを間近に見ることが出来るかもしれません。

「それ」は、連作小説『湯微島訪問記』（新潮社、一九九〇年刊）中の短編小説「湯微島の死体」を改題、一部改稿したものです。「湯微島の死体」は、元は二十代後半、発表するあてのないまま書いた独立した無題の短編小説で、これを、文芸誌「三田文学」（三田文学会）での「湯微島訪問記」連載に際し改稿、中の一編として「活用」しました（一九八八年秋季号掲載）。今回、独立した短編に戻してみました。

それ

発行 令和元年 六月五日

著者 伊井直行 II Naoyuki ©2019

発行所 レワニワ書房 <https://rewaniwa.com/>

**Rewaniwa**

